

博士論文の要旨および 博士論文審査結果の要旨

氏 名	王 竹
学 位 の 種 類	博士（比較文化学）
学 位 記 番 号	文博甲第14号
学位授与の日付	2016年3月17日
学位授与の要件	学位規則第4条第1項該当
学 位 論 文 題 目	『紅樓夢』における『莊子』の世界 <i>Zhuangzi's World in Dream of the Red Chamber</i>
論 文 審 査 委 員	主査 串田 久治 教授
	副査 Philip Billingsley 教授
	副査 大形 徹 大阪府立大学教授

<博士論文の要旨>

『紅樓夢』における『莊子』の世界

王 竹

第一章 『紅樓夢』の思想的研究序論

第一節 『紅樓夢』の時代背景とその研究史

第二節 『紅樓夢』研究の四ジャンルについて

第三節 問題提起——思想的研究の必要性

清朝第六代皇帝乾隆帝（1735～1795在位）は、父祖康熙帝・雍正帝の遺業を継承しただけでなく、豊かな財政と強大な軍勢力を背景に、西域を国土化し、チベットをも支配下において、清朝の全盛期を導いたといわれる。表向きは華やかな文化事業と、文人が重用された乾隆帝の時代であったが、その実は、良識ある知識人は自らの意思で文章を書くこともできず、思想の取り締まりの恐怖の影に苦しめられた、極めて暗い時代であった。

政治批判を厳禁した時代に生まれた『紅樓夢』が描くのは登場人物の悲劇だけではなく。当時の汚濁した社会、官僚の腐敗や不正、人々を束縛して悲劇をもたらす儒教道德を浮き彫りにし、現実社会に対する痛烈な批判を意図した小説である。

『紅樓夢』の思想研究を振り返ってみると、『紅樓夢』を中国文学・哲学研究の対象として世に問うたのは、王国維（1877～1927）の『紅樓夢評論』がきっかけである。その後、王国維の研究を継承した胡適（1891～

1962)は、『紅樓夢』の作者が曹雪芹であること、そして『紅樓夢』は曹雪芹の自叙伝にほかならないことを論証して「新紅学」を提唱した。これより多くの紅学学者によって研究が進み、『紅樓夢』研究は単なる小説ではなく、中国文化の研究対象として世界中で認められ、その研究成果が陸続と発表され、今に及んでいる。

ところで、『紅樓夢』研究は、版本学・脂学・探逸学・曹学の四ジャンルに分類されて久しいが、思想研究はあまり進んでいなかった。兪平伯(1900～1990)も『紅樓夢』の哲学研究の必要性を指摘したが、現実にはほとんど手つかずのままである。中国の文学作品は中国の伝統的哲学思想に支えられていると考えるのが妥当だから、『紅樓夢』の哲学思想を分析することがこれからの課題である。

『紅樓夢』の核心は極論すれば『莊子』の思想であるといえる。筆者は、版本学・探逸学・脂学・曹学の研究成果を総合的に理解し、曹雪芹が最も愛読した『莊子』の世界を詳細に分析することによってはじめて『紅樓夢』をより深く理解することができると考える。そのためには、脂評を抜きには語れない(第二章に詳述)。現に、脂硯齋¹⁾は第一回から『紅樓夢』の優れた文学性・思想性を評価し、『莊子』に匹敵する作品だと断言しているが、これはいち早く『紅樓夢』における『莊子』の世界を見出した評論である。

ところで、『紅樓夢』八十回の中で、『莊子』の一文、あるいは一語を引いて話を展開し、また、直接引用はしないが『莊子』を彷彿とさせる場面は十数箇所以上ある。更に、『莊子』を直接引用していないものの明らかに作者が『莊子』を意識して書いていると察せられる場面は無数にある。本論文では、莊子の思想こそ『紅樓夢』の核心であると考え、第二十一回、第二十二回、第六十三回の『莊子』所引の場面を中心に考察する。

第二章 『紅樓夢』研究における脂評の位置づけ

第一節 甲戌本にみえる脂評について

第二節 庚辰本にみえる脂評について

第三節 甲戌本と庚辰本の脂評から管見できる『莊子』

第四節 脂評の位置づけ

『紅樓夢』研究は、これまでは、版本やその続作、あるいは小説の成立過程や作者の生涯などをめぐる研究が主流であった。版本発見の最大の意義は、脂硯齋と脂批とが一躍表舞台に出たことである。脂評本の発見、とりわけ胡適が発見した「甲戌本」と俞平伯が発見した「庚辰本」は、他の版本に比べて大量の脂評があったために、最も貴重な版本とみなされている。

本章では甲戌本と庚辰本にみられる脂評から特に重要なものを取りあげ、それぞれの意味を検証しながら、『紅樓夢』研究における脂評の位置づけを明確にする。

甲戌本が発見されるまで、『紅樓夢』の版本は程高本²⁾が通行していた。その序にあるように、もともと『石頭記』と題されていた『紅樓夢』は曹雪芹によって手を加えられたことはあっても、曹雪芹の作品であるかどうか断定しがたいと考えられていた。

ところが、胡適は甲戌本第一回到上述の通説を覆すに足る内容の脂評二条——「壬午除夕，書未成，芹爲淚盡而逝」と「至脂硯齋甲戌抄閱再評，仍用石頭記」を発見した。

胡適は、これらの二文から作者は曹雪芹であること、通行している百二十回本は曹雪芹の作品ではないこと、『紅樓夢』は曹雪芹と脂硯齋との共同作業によって生まれたものであると結論した。

次に、甲戌本に次いで二番目に古い写本である庚辰本は、胡適や周汝昌の考証・研究によって、脂硯齋は庚辰（1760年）までに少なくとも四回は閲評していたこと、庚辰本の脂評の一部には署名と年代が記されていることなどが明らかにされた。

そのことによって、『紅樓夢』は独特の創作スタイルから生まれたものだとなる。すなわち小説の内容は脂評と寄り添いながらできたもので、脂評がいかに作者に近い存在であったかがわかる。

ところが、『紅樓夢』研究ではもっぱら版本や曹家の考証がもてはやされ、脂評を用いて小説全体の思想を明らかにしようとすることはほとんどなかったのが現実である。

そこで、甲戌本と庚辰本にみえる脂評をもとに、『紅樓夢』の『莊子』の世界を管見することを試みた。第一回にある脂評は、『莊子』の荒唐無稽な世界を語ることによって『紅樓夢』の立意が『莊子』であること、内容もまた『莊子』の世界を色濃く反映していることを指摘し、『紅樓夢』の筆致・構成・文学的表現までも『莊子』に酷似していることに高い評価を与えている。さらには、散逸した内容に言及している第二十五回の脂評からは、『紅樓夢』は曹雪芹自らが意図していた立意を八十一回以降も堅持しており、最後まで莊子の思想を貫いていたことを立証することができる。

第三章 宝玉の「三大病」と莊子

第一節 第一の大病

第二節 第二の大病

第三節 第三の大病

第四節 宝玉の死生観

『紅樓夢』全編中で『莊子』が引用される場面のうち、第二十一回が最も顕著である。それは『莊子』の一文を直接引用した最初であるのみならず、作者が主人公宝玉を借りて『莊子』脰篋篇を書き続けるという斬新な設定で物語を展開しているからである。

宝玉がこの脰篋篇を書き続けたのは、いかにも衝動的にしたこと、まるで偶然の出来事のようにみえるが、実は曹雪芹は宝玉に続作をさせるという描写の裏に必然的な要因を用意していた。それは本文にある宝玉の心理描写の部分に残された脂評によって明かにされた主人公宝玉の「三大病」である。

その「三大病」とは、

一 莊子のいう「自由」に憧れ、「鵬」（逍遙遊篇）のようにあるがまま生きようとする宝玉は、人から諫められることを何よりも嫌うこと。（第一の大病）

二 莊子のように「人心」（田子方篇）を大切に、「情」を重視するため、言動が儒教の伝統的価値観（礼記）に反して礼を軽んずること。（第二の大病）

三 「化す」ことにほかならないという莊子の死生観に共感し、情が極まった結果、心を鬼にして敢えて冷淡な態度へと転化してしまう「情極の毒」によって死を乗り越えようとする事。（第三の大病）

曹雪芹は莊子の思想を基盤に宝玉の人物像を設定し、宝玉を通して『紅樓夢』の至る所に「三大病」の症例を書き込んでいる。その中で最も顕著なのが、第二十一回の宝玉が脰篋篇の続作を書く場面である。脂硯斎は第二十一回で「三大病」を指摘し、それが宝玉にとって脰篋篇を書き続ける必然的な要因であることを言い、脰篋篇続作に至る経緯を明らかにしてい

る。そして、そこに込められた曹雪芹の真意を読者に正しく伝えようと、とりわけ「第三の大病」が全編に与える影響に言及したのである。

宝玉の「三大病」はすべて莊子の価値観・世界観と重なり、宝玉の思惟方法も人間観も、その根底に莊子の思想が横たわっている。莊子を理想とするが故に生じた宝玉の「三大病」は、第二十一回の場面だけではなく、全編に大きな意味を持っている。そして、脂硯斎は宝玉が肱篋篇の続作を書く直前に、この「三大病」を指摘して、読者に宝玉の「三大病」を理解させ、それによって肱篋篇続作の真意を正しく、かつ深く理解させようとした。

第四章 第二十一回『莊子』肱篋篇続作の意味するもの

第一節 「肱篋篇」続作の場面

第二節 肱篋篇続作にみえる宝玉の「三大病」

第三節 宝玉が肱篋篇を書き続ける行為の意味

曹雪芹は第二十一回で『莊子』肱篋篇の一文を直接引用した上で、主人公宝玉を借りてこれを書き続けるという奇抜な設定で物語を展開させた。いかにも宝玉が衝動的に書き続けたかのようなこの場面は、実は宝玉がいかにも『莊子』を好んだか、肱篋篇の内容に共感しているのかということを示している。わずか千字ほどの文章ではあるが、『莊子』肱篋篇の文体・表現法を用い、その内容を踏襲した続作によって、曹雪芹は宝玉の日常生活にどれほど『莊子』が浸透しているかを表現している。

しかし、この肱篋篇続作に対して黛玉はまったく価値がないと諷する詩を残したのである。この詩には二つの意味を読み取ることができる。ひとつは、黛玉の批判の裏には宝玉への深い感情を見ることができること。このことは、この詩のすぐ後に加えられた脂評が裏付けている。二つは、あ

えて黛玉に痛烈な批判をさせて宝玉の続作の価値を貶め、それによって『莊子』がいかに優れているのかを読者に伝え、『莊子』に高い地位を与えつつ、宝玉の発想の奇抜さと文才とを読者に知らしめようという曹雪芹の意図。特に脂評は、この続作の筆致がまるで老莊と同じであると絶賛したうえで、宝玉の思惟方法や価値観が莊子の世界に共感しているからこそ続作を書き続けることができたのだと強調している。さらに、前章で明らかにしたように、肱篋篇続作の必然的要因は、肱篋篇続作の直前の脂評にある宝玉の「三大病」であった。そして、この脂評が続作の直後にあえて「どこから発想したのか」と問いを発したのは、その答えは「三大病」にあると示唆し、読者に肱篋篇続作の真意を解明する道に導こうとしているからである。

また、第二十一回の脂評に指摘された宝玉の「三大病」に基づいて肱篋篇続作の内容を分析すると、まず冒頭から「花を焚き、麝を散じてしまえば、奥の部屋から忠告というものを解放することになろう」と、襲人を「焚き」麝月を「散じて」二人を消滅させ、「諫められること」から解放されたいといい、莊子の世界に憧れ自由を求める宝玉が、「第一の大病」から発する苦悩を、このような極端な表現で訴えようとしたと理解できる。

次に、宝玉は、「宝釵の気高い姿をそこない、黛玉の不思議な肉体を灰にして、情意というものを滅じてしまえば、奥の部屋的美醜の差はなくなってしまうだろう」と、美しい宝釵と黛玉が消滅すれば、彼女たちに対する「情意」も存在しなくなり、思い悩みから解放されると書いている。ここにいう「情意」とは、宝釵と黛玉の男女間の恋愛ではない。それを裏付ける脂評が散見する。最も代表的なものが第十九回・二十三回・二十五回の脂評で、宝玉の第二の大病——「情を重んじ礼を軽んずる」をいうものである。

自ら「情意」を上手く抑制できない宝玉は、「花を焚き、麝を散じ」と

いう一句と併せて、続作の後半に「宝釵の気高い姿をそこなえば、あこがれる心もなくなり、黛玉の不思議な肉体を灰にすれば、その才を慕う心も消えよう」と書き、「焚」・「散」・「戕」・「灰」という極端に非情な表現を使って悩みの解消法を試みた。これは情を最も重視する宝玉が発する言葉とは考え難いのであるが、これこそ、「第三の大病」——「情極の毒」の症状だと考えられる。

以上のように、肘篋篇続作の内容は、莊子を理想とするが故に生じた宝玉の「三大病」を浮き彫りにしているにほかならない。

更には、第二十二回にみえる脂評を通してみれば、宝玉が肘篋篇を書き続ける行為そのものが、宝玉が莊子のいう絶対的自由（応帝王篇）を一貫して求め続けていたこと、日々の生活の中で宝玉が希求する生き方が莊子の理想に合致していたことがわかる。

曹雪芹は、主人公宝玉に肘篋篇を書き続けさせるという斬新な手法によって、宝玉（曹雪芹）がいかに『莊子』の世界に憧れていたか、より効果的に読者に語ることができた。また、脂評と併せて読み解くと、続作の内容が宝玉の「三大病」を反映していること、宝玉の生き方とはまさに莊子そのものであることを知ることができる。すなわち、第二十一回の肘篋篇を書き続ける場面は、『紅樓夢』全編にとって、主人公宝玉の価値観、思惟方法や人間観などの根底に莊子の思想が横たわっている最も重要な場面であるといえよう。

第五章 『紅樓夢』における「無用の用」

第一節 第二十二回所引『莊子』列禦寇篇及び人間世篇

第二節 第二十二回脂評が語る『莊子』の「無用の用」

第三節 『紅樓夢』に点在する「無用の用」

第四節 「無用の用」による価値観の崩壊

第二十二回には『莊子』列禦寇篇と人間世篇を引用したくだりがあり、それらを分析すると、主人公宝玉の「無用こそ有用」であるという考え方を明らかにすることができる。

まず、列禦寇篇についてしてみると、「巧者」「知者」は苦勞することが多く、人に嫉妬され、往々にして災いを招くが、正反対の「無能者」は、成果も出世も期待されず、ただひたすらのんびり生きることができる。何よりも重要なのは、「無能者」は他人から嫉妬されることがないため、攻撃の対象になることもなく、決して災難を招くこともない。

次に人間世篇であるが、『紅樓夢』の引く人間世篇は「山木自寇、源泉自盜」とあり、『莊子』人間世篇「山木自寇也、膏火自煎也」と同じではない。これは曹雪芹自らアレンジしたものである。「源泉自盜」のすぐ下にある脂評を見ると、人知はその身に害をもたらし、無用であれば自由自在に生きて天寿を全うすることができるという、いわゆる「無用の用」をいう作者の意図が明らかである。

また、この第二十二回の脂評では、『紅樓夢』の六人の登場人物を挙げ、常識では高く評価されるべき長所を、それぞれ身を誤る原因はとなっていると指摘している。本脂評で、王熙鳳は「王熙鳳は機心のせいで（阿鳳是机心所誤）」と評されるその「機心（机心）」もまた、『莊子』天地篇に由来する。「機心」とは、計算、謀略、策略を使いこなす心である。頭脳明晰の王熙鳳は、本来もてる「純白」の心、「神生（性）」が乱れ、次から次へと「機心」が生まれ、ふくれあがる欲望に策弄され、結果的に自らの謀略に陥り、命を失うことになる。まさに脂評「すべては莊子に言い当てられた（皆不能跳出庄叟言外）」を裏付けているといえる。

要するに、この脂評に挙げられた六人の登場人物は、まるで『莊子』山木篇のように、有用であるからこそ災いを招き、果たして報われない結末になる。脂硯齋は、曹雪芹の描く人物がまさに莊子のいう不幸な人生

——絶対的な価値が認められず、生かされないために結果的に身を誤った人生を読み取り、「すべて莊子の言うとおりだ（皆不能跳出庄叟言外）」と断言し、曹雪芹の描く人間像は『莊子』の考えを具体化したものであると示唆していると考えてよい。

第二十二回にみえる「無用の用」の思想は、実は『紅樓夢』全編にわたって描かれている。たとえば、第一回に宝玉が石の生まれ変わりとして設定されていることは、容易に『莊子』人間世篇の匠石の話を追想させる。すなわち、莊子のいう無用の大木は、無用であるがゆえに寿命を全うしたように、無用の石は捨てられたがゆえに、人間に生まれ変わることができ生命を全うする。このように、『紅樓夢』は第一回から、無用の石が人間になる機会を与えられたという設定で宝玉の人生の物語を展開していくのである。

また、第五回に登場人物の数奇な運命を暗示する詩では、『莊子』人間世篇の宋の荊氏の話を下敷きにしていると考えられる。莊子は良質の木（楸・柏・桑）は細かろうと太かろうと、結局は人間に利用されるために伐採されて命を落とす運命から逃れない、もの自身の「有用」が害を招く源となることをすっぱ抜いた。同じように、『紅樓夢』の登場人物は、自ら持つ「有用」なものが身を滅ぼす原因となっている。これは「無用の用」の裏返しであるが、有用は不幸を招くという莊子の考え方が、登場人物の人生に色濃く映し出されている。

さらに、第五十四回に孫悟空の尿を飲んだ嫁は口の達者になるという辛辣な冗談も、『莊子』列禦寇篇の曹商の話を追想させる。曹商が秦王の痔を舐めて地位と富を手に入れ、貧しい莊子を嘲笑したのに、莊子は自身の尊厳を守った上で曹商に精神的打撃を与えた。曹雪芹も、孫悟空の尿を飲んでまで気に入られている嫁の生き様が暴露し、立身出世のためには人間としての品格や尊厳を捨ててしまう醜い社会の現実をさらけ出し、読者の

笑いを誘いながら、権力に媚びて成り上がった者を根本的に否定したのである。

曹雪芹が「無用の用」を全編に描いたのは、ただ「無用の用」を謳歌するためではなく、二つの批判の意を読者に提示するためであった。

ひとつは、本章第二節で言及した王熙鳳の「機心」から、曹雪芹の人間の飽くなき欲望に対する批判を読み取ることができる。曹雪芹は自らの欲望のために働かせたはずの「機心」が、実は自らこうむる禍の種を蒔いていることを描き出した。

もうひとつは、曹雪芹が「無用の用」を説くことで人間社会の矛盾を暴き出していることである。『莊子』山木篇に批判されたように、有用なものが身を損ない、無用もまた捨てられ欺かれるとは、なんと理不尽な世界であろうかと、曹雪芹は、莊子の「無用の用」に共感しながら、「有用」も「無用」も結局は報われない理不尽な社会に生きる人々の人生を記録し、深い絶望感を吐露しつつ、そのような社会に対する批判を綴ったのである。これこそ、莊子の「無用の用」を全編に取り込む真の意味であろう。

『紅樓夢』における「無用の用」は、第二十二回に『莊子』列禦寇篇及び人間世篇を引用することによって顕著に反映されている。のみならず、第二十二回の脂評と併せて読み解くと、曹雪芹が「無用の用」を用いて宝玉の人物像を作り上げたこと、「無用の用」を意識して全編の登場人物の運命を設定して物語を展開させ、当時の儒家的価値観を破ろうとしていること、すなわち、『紅樓夢』全編に「無用の用」の価値観を散りばめていることが検証できる。まさしく脂評のいうように、「すべて莊子の言うとおりだ（皆不能跳出庄叟言外）」ということになるだろう。

第六章 第六十三回所引范成大「重九日行營壽藏之地」の場面と『莊子』

第一節 范成大「重九日行營壽藏之地」と『莊子』

第二節 王梵志「無題」詩二首及び「道情詩」と『莊子』

第三節 曹雪芹の人生観

本章にとりあげる第六十三回のこの場面には脂評はない。しかし、曹雪芹は妙玉の口を借りて范成大的詩「重九日行營壽藏之地（重九の日に壽藏の地を行營す）」の一句を引用して絶賛したことは、先の第二十一回で宝玉の手を借りて肱篋篇を書き続けた宝玉の心の内を吐露したことと、その手法は全く同じである。そこで、これは作者が単に物語の展開に合わせて適当に范成大的詩を引用したのではなく、そこには必ず作者の意図——詩句の背後に作者の真意が込められていると考え、所引の范成大的「重九日行營壽藏之地（重九の日に壽藏の地を行營す）」全詩を調べてみた。すると、この詩もまた『莊子』を典故とした作品で、世間の常識に縛られない真に自由な生き方を求める内容であることが明らかになる。曹雪芹は妙玉に范成大的詩句を引用させることで、作者自身の死生観——人間いずれ死ぬので現生の栄光富貴はすべて脆いものであることを高らかに宣言している。さらに、錢鐘書が『宋詩選注』の中で、范成大的詩中の一句「鉄門限」は「王梵志の二首の詩」に基づく指摘していることを受けて調べてみると、実はそれが『全唐詩補逸』巻第二所載の王梵志「無題」詩二首を典拠として詠まれた作品であることが判明した。

ところで、王梵志の別の詩「道情詩」には、より一層鮮明にその死生観が描かれている。王梵志によれば、「生」は自分の意志で得たものではなく、「寒」や「飢」という苦しみの世界にほかならない。反対に、死の世

界、あるいは生まれる前の世界は、必ずしも苦しみとは限らない、否、現世の苦しみを感じることはない世界は幸せだというのである。

このように王梵志は残酷な現実世界を突きつけて、人間の苦しみや悩みを一笑に付そうとしている。この王梵志の描く死後の世界は、莊子と髑髏との対話（『莊子』至楽篇）を容易に想起させる。

言うまでもなく、王梵志も莊子も死後の喜びを語ることによって、死を勧めているのではない。それは、現実社会で悩み苦しむ人間の愚かさを諷刺し、その苦しさから解放されることを願うものである。王梵志が「我れを未だ生まれざりし時に還せ」と結ぶのは、髑髏が莊子の申し出を拒否して死後の世界にとどまりたいと言ったのと同じである。すなわち、莊子は死後の楽しみを積極的に説くことによって生きている人間の苦しみを浮き彫りにし、王梵志は生の苦しみから逃れることを求めて「生まれる前に戻りたい」と叫ぶのである。一方は諷刺で一方は心の叫びだが、いずれも生の苦痛と死後の喜びを語る点は同じである。

このように、王梵志の死生観を見ることで、『紅樓夢』がいかに『莊子』の死生観に共感しているかがわかる。

ところで、曹雪芹は范成大と王梵志の詩の境地を第六十三回のこの場面に反映させるだけでなく、第一回の「好了歌解注」や第五回の「飛ぶ鳥それぞれに林に帰る（飞鸟各投林）」でも彼らに共感する思いを描き、人は貴賤や貧富にかかわらず必ず無の世界（死の世界）に入る現実を冷静に受け止め、欲望を抑え悩みを捨てて「檻外の人」になることで救われている。これこそ王梵志、范成大、曹雪芹三者が共有する人生観であろう。

以上、王梵志の詩が莊子の思想を語るものであったこと、范成大的詩がこの王梵志の詩に依拠していることを通して、両者に共通しているのは、人間の生と死を冷徹に見据えている点であろう。王梵志が莊子の死生観に共感し、范成大は王梵志の詩を借りて莊子に共感し、そして曹雪芹の詩詞

は范成大の詩と重なり、さらに范成大の詩を引用して莊子の世界と一体となっている。曹雪芹が妙玉に「漢，晋，五代，唐，宋以来，古人の作った詩にいい詩はないが、ただ二句だけいいのがある。」と言わせ、范成大の「重九日行營寿藏之地」を引用したのは、そこに莊子の世界を見たからにほかならない。

結 語

『紅樓夢』が書かれた清の時代は、「文字の獄」という言論統制・思想弾圧の恐怖に苦しめられた、極めて暗い時代であった。作者曹雪芹は、清王朝の暗部を容赦なく暴露し、儒教的封建社会が束縛している哀れな人間の姿を暴き出す一方で、自我を尊重し、自己の感情を大切に、自由や平等を切望する人々の生きざまを描いた。『莊子』に深く影響され、『莊子』に最も高い評価を与える作者は、莊子の世界に共感する主人公宝玉を通して、伝統的礼教の無意味さを、立身出世に翻弄される虚しさを、貧富・正庶・主従・男女などの無慈悲な差別を、現実社会の理不尽さを描きながら、自由と平等が得られない封建社会に叛逆の意を示そうとしたのである。その叛逆になくてはならない哲学が『莊子』にあった。そして、儒教の呪縛から解放してくれる境地——儒家的価値観を打ち壊す絶対的自由を追求し、それを『莊子』の世界に求めた。莊子の価値観や人生観に共感した曹雪芹は、登場人物の言動に莊子の思想を注入し、儒家思想と正反対の考え方を称揚して、封建社会に彷徨う人々に、桎梏から脱出せよと喚声をあげていたのである。

しかし、『紅樓夢』はただ儒家に対するアンチテーゼを開陳するために『莊子』の世界を描き出したのではない。さまざまな考え方や価値観が包容され、人間的感情が尊重され、喜怒哀楽が率直に表出でき、自由に言論できる社会を期したのである。

『紅樓夢』は、曹雪芹が清王朝の抑圧された社会にあって、莊子の発想や価値観、そして人間観を随所に取り込み、人間本位の社会を希求し、自由と平等を謳歌する新たな哲学世界を構築しようとした作品であった。

言うまでもなく、『紅樓夢』中の『莊子』の世界は本稿で取り上げた場面だけではない。管見の限りでは、『莊子』を直接引用したり、『莊子』を典故としたり、『莊子』の世界を彷彿とさせる場面は、本稿で扱ったもの以外に少なくとも十数箇所ある。そして、その引用された『莊子』の内訳は、内篇が五箇所、外篇が十四箇所、雑篇が四箇所である。しかし、筆者は、曹雪芹は厳密に区別していたのではないと理解する。ただ、第四章第一節及び注140で少しく言及したように、曹雪芹が愛読した『莊子因』を他の注釈と比較することによって、曹雪芹が随所に引用する際に内篇・外篇・雑篇の違いを意図して選んだのかどうか解明できるかもしれない。本稿で取りあげることができなかった十数箇所の分析とともに今後の課題としたい。

もうひとつ、残された課題がある。それは曹雪芹の祖父・曹寅（1658～1712）のことである。曹寅もまた『莊子』を好んだ文人であった。曹寅の没後に生まれた曹雪芹は、曹寅から直接教育を受けたことはなかったが、祖父の詩文集『棟亭集』を読んで育った曹雪芹が、どのような影響を受けて『莊子』の世界に憧れるようになったかを解明することである。宝玉の人物像が曹雪芹の自画像であるとは定論であるが、筆者は宝玉の人物像と曹寅の人物像とが重なると考えている。曹雪芹が祖父の生涯から、そしてその著『棟亭集』から受けた影響を知ることは、『紅樓夢』にみえる『莊子』の世界を解明するうえで大きな手がかりとなるに違いないと考えるからである。

- 1) 脂批の研究の一方で、当然のことながら、脂硯齋とはどういう人物であろ

博士論文の要旨および博士論文審査結果の要旨

うかという問題も持ち上がった。脂硯齋に関しては今も多くの謎が残ったままである。諸説あるが、曹雪芹の知己とするのが筆者の考えである。

- 2) 程偉元（1742?～1818?）と高鶚（?～1815?）によって整理された版本。乾隆末年、程偉元は寄寓していた北京で『紅樓夢』百二十回の写本を入手した。高鶚は程偉元に協力して『紅樓夢』の補訂作業を行い、乾隆五十六年（1791年）、萃文書屋より百二十回『紅樓夢』（程高本）を刊行した。

＜博士論文審査結果の要旨＞

論文提出者：王 竹

論文題目：『紅樓夢』における『莊子』の世界

学位申請の種類：甲（課程博士，比較文化学）

本論文は、清朝第六代皇帝乾隆帝による言論統制・思想弾圧——いわゆる「文字の獄」の压制下、王朝の暗部を容赦なく暴露し、儒教的封建社会が束縛する現実を暴き出す一方で、自我を尊重し、自己の感情を大切にし、自由や平等を切望する人々の生きざまを描いた『紅樓夢』を、その根底に横たわる『莊子』を通して分析・解明した思想的研究である。

『水滸伝』・『金瓶梅』・『三国志演義』に代表されるように、中国人が小説に期待するものは大団円であった。そのような中で、莊子の発想や価値観、そして人間観を随所に取り込み、人間本位の社会を希求し、自由と平等を謳歌する新たな哲学世界を構築しようとした『紅樓夢』は、古いしきたりを打ち破った、中国文学史上まれにみる悲劇的作品とされる。

『紅樓夢』研究に思想面での観点が見落とされていることは夙に指摘されていた。それにもかかわらず、今以て小説の成立過程や作者の生涯、あるいは版本の考証や続作をめぐる研究が主流を占め、『紅樓夢』の思想に言及するもの、とりわけ脂評と本文とを一体化して莊子との深い関係を分析した例は中国でも非常に少なく、日本では皆無に等しい。筆者は、儒家と道家の間で精神的バランスを取った古代の知識人と違い、曹雪芹は儒家社会が束縛している人間の哀れな姿を無情にも暴き出し、現実の苦悩から解放してくれる境地を『莊子』の世界に求め、莊子の世界に共感する主人公宝玉を通して、伝統的礼教の無意味さ、立身出世に翻弄される虚しさ、

博士論文の要旨および博士論文審査結果の要旨

貧富・正庶・主従・男女の差別など、現実社会の理不尽さを描きながら、自由と平等が得られない封建社会に叛逆して儒教的束縛から己を解放せよと説こうとし、その叛逆になくてはならない哲学が『莊子』にあったという。

本論文が画期的な『紅樓夢』研究であることは、以下の点で明らかである。

1. 中国・日本における『紅樓夢』研究史を整理し、これまで日本の研究者が用いることのなかった膨大な文献を渉猟し、新たな問題提起、すなわち脂硯斎の脂評に基づいた「思想研究」の必要性を提唱した（第一章）。

2. 中国国内では非常に重視されてきた脂評——事実、脂評によって『紅樓夢』の作者が曹雪芹であること、その卒年、『紅樓夢』の原本は通行の百二十回本ではなく八十回であること、作品は曹雪芹と脂硯斎との共同作業によって生まれたものであることも明らかとなったのだが、これまで脂評は写本のみで活字本がなく難解であるため、日本の研究者はひたすら敬遠してきた。その結果、伊藤漱平のように「資料的価値はない」と断定して憚らず、以来、それを定論として疑うことなくずっと脂評を等閑視してきた。筆者はその誤りをひとつひとつ検証してその「定論」を完全に覆し、脂評の資料的価値の高さを証明した（第二章）。なお、作家出版社より2004年に甲戌校本、2010年に庚辰校本の活字本が出版されたので、今後は日本の研究者も脂評の解説に積極的に取り組むことであろう。また、筆者が日本中国学会（2015年10月）において研究発表した時の司会者・船越達志氏もこの点を高く評価している。

3. 第二十一回で曹雪芹が主人公宝玉に『莊子』肱篋篇を書き続けさせるという斬新な手法を用い、莊子の価値観に憧れる宝玉を描いたことを指摘した上で、脂評にみえる宝玉の「三大病」に着目し、これまで論じられることのなかった「肱篋篇続作の真意」に言及し、宝玉の「三大病」がす

べて莊子の価値観・世界観と重なること、そして儒教道徳への叛逆であることを検証した（第三章）。

また、第二十二回の脂評と併せて読み解くことで、第二十一回の脰篋篇続作が「三大病」を反映した内容であること、第二十一回の場面は宝玉の価値観、思惟方法や人間観などの根底に莊子の思想が横たわっていることを物語る最も重要な場面であることを明らかにし（第四章）、さらには、『紅樓夢』全編に散りばめられる「無用の用」の価値観を分析し、第二十二回に『莊子』列禦寇篇及び人間世篇を引用したことの作者の意図が、人間関係に思い悩む宝玉が『莊子』の「無用の用」に救われ、より人間的な生き方を模索することにあつたと論証している点も高く評価できる（第五章）。

膨大な量の脂評を日本語に訳し、脂評を駆使して『紅樓夢』に描かれた真意を読み解き、曹雪芹が『莊子』を借りて当時の汚濁した社会、官僚の腐敗や不正、人々を束縛して悲劇をもたらす儒教道徳を浮き彫りにし、現実政治に対する痛烈な批判をしていたことを解明した本論文は、日本の現代文学研究者が避けてきた中国古典学、とりわけ古代哲学の文献を深く理解して『紅樓夢』の思想を解明した画期的な研究である。

4. 徹底的に典故を調べる古典学の研究方法により、これまで誰も指摘することがなかった新資料を検証して、曹雪芹が登場人物の口を借りて高く評価した宋の范成大「重九の日 寿蔵の地を行営す」詩が、『莊子』の死生観を謳歌して詠んだ唐の王梵志「無題」詩二首及び「道情詩」を踏まえた詩であることを突き止め、曹雪芹が『莊子』の死生観に共鳴して范成大の詩を引用した真意を解明した。それによって、これまでの日本の研究者が犯してきた不備や誤りを訂正することができた（第六章）。これまた、現代中国文学研究者が避けてきた古典学をしっかり修得したが故の成果である。

博士論文の要旨および博士論文審査結果の要旨

章立ては以下の通りである。

第一章 『紅樓夢』の思想的研究序論

第一節 『紅樓夢』の時代背景とその研究

第二節 『紅樓夢』研究の四ジャンルについて

第三節 問題提起——思想的研究の必要性

第二章 『紅樓夢』研究における脂評の位置づけ

第一節 甲戌本にみえる脂評について

第二節 庚辰本にみえる脂評について

第三節 甲戌本と庚辰本の脂評から管見できる『莊子』

第四節 脂評の位置づけ

第三章 宝玉の「三大病」と莊子

第一節 第一の大病

第二節 第二の大病

第三節 第三の大病

第四節 宝玉の死生観

第四章 『莊子』肱篋篇続作の意味するもの

第一節 「肱篋篇」続作の場面

第二節 肱篋篇続作にみえる宝玉の「三大病」

第三節 宝玉が肱篋篇を書き続ける行為の意味

第五章 『紅樓夢』における「無用の用」

第一節 第二十二回所引『莊子』列禦寇篇及び人間世篇

第二節 第二十二回脂評が語る『莊子』の「無用の用」

第三節 『紅樓夢』に点在する「無用の用」

第四節 「無用の用」による価値観の崩壊

第六章 第六十三回所引范成大「重九日行營壽藏之地」の場面と『莊子』

第一節 范成大「重九日行宮壽藏之地」と『莊子』

第二節 王梵志「無題」詩二首及び「道情詩」と『莊子』

第三節 曹雪芹の人生観

結語

筆者は、曹雪芹が実際に読んでいた清・林雲銘撰『莊子因』と晋・郭象撰『莊子集釈』との違いを比較検討し、また、曹雪芹に影響を与えた祖父・曹寅の詩文集『棟亭集』を解説することによって、『紅樓夢』にみえる『莊子』の世界の更なる究明に取り組んでおり、その成果は大いに期待できる。

以上のように、本論文は博士の学位を与えるに十分な資格を有するものと認められる。

以上

2016（平成28）年2月20日

主査 串 田 久 治

副査 Philip Billingsley

副査 大 形 徹